

中国史書について

桑田昭弘（中四国支部）

本稿は、倭人伝を数回読んだ程度の筆者による独善的な見解である。悪しからず。

1. 魏使の目的地

魏志倭人伝の冒頭は倭国への行路を記載している様だ。不弥国以前の記載表現と投馬国以降の記載表現は異なっており、倭国への行路は不弥国で完了している様に思われる。魏使の目的地は伊都国、奴国、不弥国であり、ここが魏と直接交流を行う倭国の中枢の様である。

投馬国以降は、倭国を象徴する2つの地域について記述している様だ。

投馬国：帯方郡から南に向かい船で20日にて行ける。

邪馬台国：帯方郡から南に向かい船で10日と徒歩で1か月にて行ける。

投馬国は魏と直接交流が無かった地域である故に詳細を記載できなかった様だ。

邪馬台国は魏と交流のある伊都国、奴国、不弥国などを含む地域であり、詳細を記載した。尚、女王は誰とも会わずに祈りを捧げる事が出来る場所に居住し、ここが邪馬台国の都（女王国）とされた。

2. 国名

伊都国、奴国、不弥国、投馬国、邪馬台国そして倭国と数々の国名が出てくる。魏志倭人伝の著者は、知り得た地名を区別なく・・・国と記している様である。現在に於ける町も村も県も更に大きな地域も全ての地名に・・・国と記している様だ。

伊都国：奴国内にある行政府（卑弥呼の弟？による政務地）

不弥国：奴国内の町（聖地？）

邪馬台国：九州北部地域（ヤマト）

因みに九州南部地域はハヤト？

3. 卑弥呼

2世紀末の倭国大乱は、中国の様々な歴史書にも記載されている事より倭国内の王権を争う様な戦いと思われる。ならば筆者の「日本の始まり」に記した本来の漢委奴国王（出雲）と新たな漢委奴国王（九州北部）との戦いではなかろうか。

そして、何年も続いた争いは両勢力が承諾する女王卑弥呼の誕生にて終結した。

出雲の風習（宗教的女王の存在）に従ってイザナギ・イザナミ両者の流れを受け継ぐ『ヒメ』（卑弥呼）が女王として九州ヤマトに赴く事で争いは終わった様だ。

蛇足：出雲にイザナギ・イザナミの流れを受け継ぐ姉妹がいた。倭国大乱の後に姉妹は九州ヤマトに赴いた。

姉（天照大御神）は出雲の風習に従い宗教的女王として。妹（月読命）はイザナギの流れを受け継ぐ奴国王（須佐之男命）の妻として。

4. 倭国王

漢委奴国王を委奴国という一国の王と推測される有識者もいる。

後漢より金印を下賜されるからには倭国全土の王に匹敵する地位が必要と思われる。委奴国はその様な権力のある国なのだろうか。1世紀に倭王は存在しなかったと思えるが、倭国連合を束ねる奴国王（倭の奴国王）が存在したならば倭王に相当すると見なされたであろう。

後漢書にて2世紀初めに倭王師升が生口160人を献じ、謁見したと記されている。他の史書では倭王師升で無く倭面土地国王師升などと記されている。倭面土地国王については様々な解釈がある様だが、その中に「一つのちひさき國の王」との解釈もある様だ。後漢より金印を下賜される国としては余りに小さな国であった為でなかろうか。1世紀に倭国全土を統治する国に下賜したはずの漢委奴国王が、2世紀には何故か倭面土地国王となっていた。

魏より倭王の称号を与えられるとすれば、倭国の大部分を影響下においた国である筈である。倭国大乱後に出雲と連携し、漢委奴国王の後継者と称する九州ヤマトの『ヒメ』ならば親魏倭王の称号を手にすることができたのであろう。